『古代アメリカ』 1, 1988, pp.41-58

＜研究ノート＞

先史ティワナク社会の政治経済過程の研究

渡部森哉
(東京大学大学院)

【キーワード】
領域、飛び地、自給自足、再分配
territory, enclave, self-sufficiency, redistribution

1．はじめに

ティワナク遺跡は現在のペルー、ボリビア両国にまたがるティティカカ湖の南東約 15km、標高約 3800m に位置する巨大な遺跡である。周囲の遺物散布地を含めると総面積 6k ㎡に及び、その中核部には切石でできた石像建造物が立ち並ぶ。アカパナと呼ばれる底部 200 × 200m、高さ 17m の 7 段構造のピラミッド、130 × 120m の基壇構造のカラササヤの神殿、28 × 26m、深さ 2m の半地下式神殿などは特に有名である。アンデス世界においては大遺跡は北部地方に多く、ティティカカ湖周辺のように気候が厳しい土地にこのような大遺跡があることは非常に異質であり、これより南にはこれに匹敵する遺跡は存在しない。

さらに、ティワナクの特殊性は、ティワナク様式と呼ばれる土器をはじめとする工芸品が、広くアンデス地帯南部に分布することにも認められる。その分布範囲はペルー南部、チリ北部、アタカマ砂漠、アルゼンチン北西部、ボリビア東斜面と四ヶ国にまたがる (図 1)。先インカ期においてこのように同じ様式の遺物が広範囲に分布する例はほかに例がない。

アンデス世界の南に巨大な遺跡があり、そこから出土する遺物と類似するものが数百キロ先にまで分布する。このティワナク遺跡を中心とした社会はどのような性格を有していたのか、これが本論文における問題提起である。その分析の切り口として本論文ではティワナク遺跡そのものではなく、遠隔地に認められるティワナク様式の遺物に注目する。筆者は 1996 年 6-7 月に現地調査を行い、遺物を実見し、それが出土した遺跡を訪問した。以下ではこの調査結果を元に、地域ごとに遺物、遺跡の特徴を整理し、それによりティワナク社会の全体像、特にその範囲を明らかにし、その政治経済の仕組みを検討する。

ここで、政治経済 (political economy) という用語について触れておく。アラン・L・コラタは「人間が社会の生物的、文化的基盤を再生産する生産、分配、消費の過程の総体」 [Kolata 1996a: 20] と定義しているが、本論文ではより具体的に、食料、工芸品といったモノが生産、分配、消費され、建造物が建設、維持される仕組みのことを指して用いる。

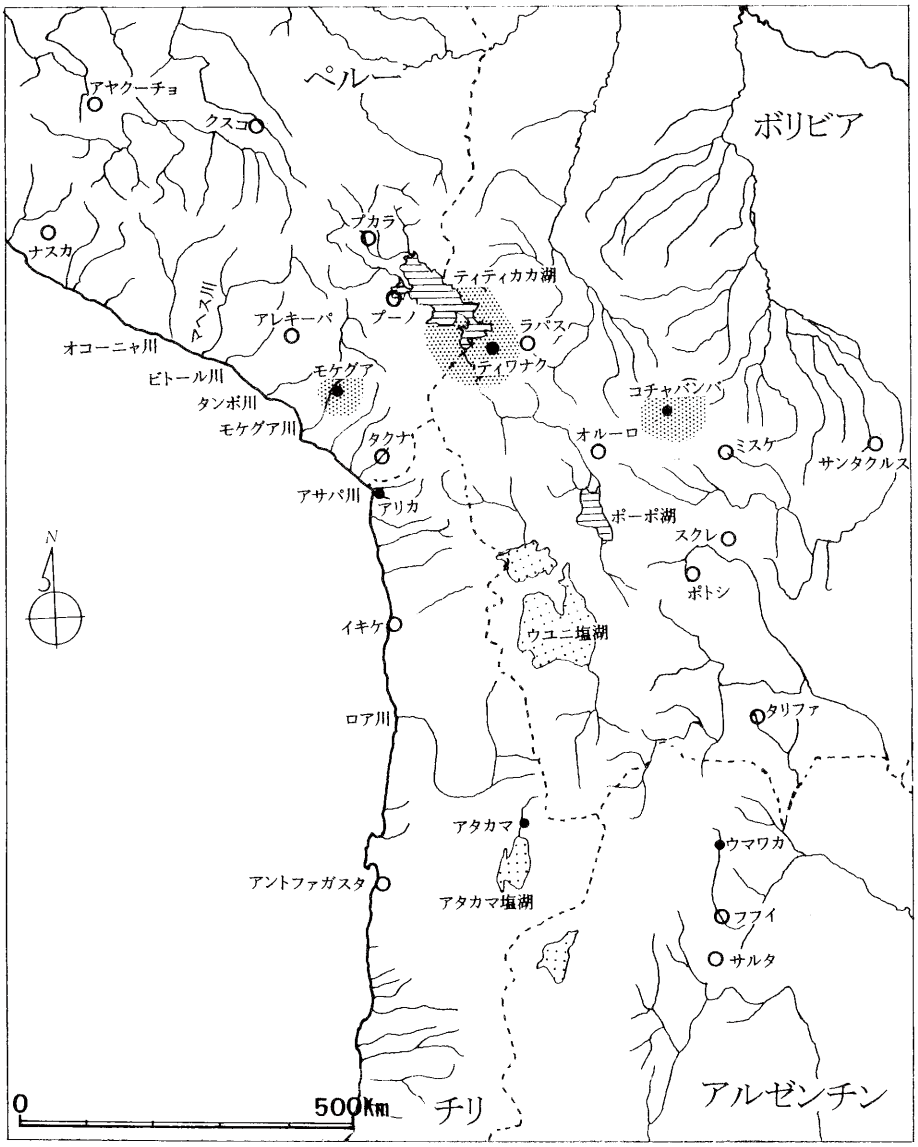

図１　中央アンデス南部

● 本論文で扱う遺跡、地域
○ 現在の町

本論文で設定するティワナク社会の範囲

2．時間的枠組み

これまでティワナク遺跡の編年は多く提唱されている。最も古い編年は、ウェンデル・ベネットによるもので、発掘データに基づき初期、古典期、退廃期の3期に分け、それに伴って土器の変化が見られると述べている [Bennett 1934]。その後ポンセ・サンヒネスは、C14年代と層位の観察によりティワナクをⅠ期からⅤ期まで分ける進化論的編年を作り上げた [Ponce-Sanginés 1976]。しかしながらそれに伴う土器の特徴については述べられていない。

そして、多くの研究者はベネットの古典期、退廃期をポンセ・サンヒネスの編年のティワナクⅣ期、ティワナクⅤ期とそれぞれ対応させて記述してきた。これらの研究者の間では以下のような認識がある [Janusek 1994: 92]。

ティワナクⅣ期の土器は器形が多様で濃い赤色のスリップを施して磨き、多彩色で動植物など手の込んだ具象的モチーフを描く。ティワナクⅤ期の土器は簡素化し、薄いオレンジ色のスリップが施され、研磨されず、黒でおおざっぱな幾何学文様が描かれる。そして800年以降になるとⅣ期の土器は現れない。

しかしながらベネット、ポンセ・サンヒネスの編年は層位的データによって裏付けられておらず、はなはだ不正確なものである。1988年以来ティワナク遺跡、ルクルマタ遺跡の発掘に携わっているジャヌセックによれば、土器様式からティワナクⅣ期、Ⅴ期を区分することはできないという [Janusek 1994: 92-93]。

従って本論文ではティワナクⅣ期、Ⅴ期を合わせてティワナク期と呼ぶことにする。ティワナク期の絶対年代については、ティワナク遺跡、ルクルマタ遺跡 の住居址で得られたC14年代のデータから、A.D.400-1100年頃に対応することが裏付けられる [Janusek 1994]。従って今回はひとまとめにティワナク期と呼ぶが、それは700年にわたる時間幅を持つことに留意しなければならない[1)]。

さて、このティワナク期の指標とされるティワナク様式は、ティワナク遺跡からの出土遺物に特徴づけられる芸術様式である。それは、ケロ、朝顔鉢、香炉などの様々な器形にピューマ、植物など具象的モチーフ、幾何学文様が描かれる多彩色土器に代表される。またそのモチーフは織物、金属製品、木器などの媒体にも表現される。以下の分析ではとりあえず、こうしたティワナク遺跡出土土器と共通するモチーフをもつ多彩色土器をティワナク様式と認定し、議論を進める。

3．垂直列島モデルと高原モデル

これまで、周辺地域のデータは常にティワナクを中心とした視点によって解釈されてきた。つまり研究の方向はティワナクの影響範囲を定めることにあり、それによりティワナクの持つ意味を評価されてきた。こうした研究の流れは、そのもとを突き詰めればティワナク遺跡の性格に還元される。つまりティワナク遺跡が規模、工芸品の質、石造技術などあらゆる面において突出した存在であるため、広範囲にティワナク様式の工芸品が分布することは当然なことであった。ティワナク様式の遺物は、それがたとえ微妙なものであってもティワナクの影響の証拠として自然に受け取られてきたのである。本論文ではこうした先入観による解釈の歪みを避け、一次データである発掘資料に戻って再検討する。

さて、周辺地域においてティワナクの影響といってもそれは具体的にどのように解釈されるのか。これまで2つのモデルが提示されている。1つはジョン・V・ムラの垂直列島モデルであり、もう1つはデイヴィッド・L・ブロウマンの高原モデルである。

以下ではまずムラ、ブロウマンのモデルを検討し、それがティワナク研究と関連してどのような展開を見せてきたかを概観する。

3－1．ジョン・ムラの垂直列島モデル

多くの生態的に異なった土地を垂直に利用して生産物の補完体系をつくりあげ、豊かな資源を利用する自給自足的システムを、ムラは垂直統御と名付けた。そして中心地から離れた遠隔地に飛び地を作り、そこに人間を送って生産活動させる場合があり、それを“垂直列島”と呼び、垂直統御の一形態とした。

ムラは16世紀に書かれた役人による巡察記録と年代記を用いて、1460-1560年の垂直統御の5つの事例を挙げている[Murra 1972]。ここでは垂直列島型環境利用の具体例としてのルパカ族の事例を紹介する。

ルパカ族はティティカカ湖周辺に生活し、人口は100,000-150,000人といわれる。標高3800m以上の土地に生活し、そこではで家畜が飼育され、ジャガイモなどが栽培される。そしてそれ以外に、中核部から歩いて5-10日、あるいはそれ以上の距離の所に大規模な飛び地を建設した。西の太平洋沿岸の飛び地では、綿やトウモロコシを栽培し、東斜面即ちアマゾン側ではコカ、木材が栽培された。

ムラは垂直列島型環境利用の特徴として以下の5点を挙げている[Murra 1985b: 16,17]。

①各エスニック・グループが様々な資源を得るため異なる生態学的土地を利用する。
②そのために永続的な飛び地を建設し、島のような形態をとる。またそれは季節的移住や移牧とは区別される。
③飛び地の人々は中心部と互酬と再分配の関係にあり、また、親族関係を通じ中心部における土地の権利も保有している。
④飛び地は複数のエスニック・グループに利用される。そこでは緊張関係もありうるが、多くの場合共存している。
⑤中心部が大きくなると二つの構造変化が起こる。一つは飛び地がさらに遠くに建設され、それに伴い親族関係によるつながりが難しくなるということ。もう一つは飛び地の機能の変化で、土器製作、金属細工なども行なわれるようになる。

ジョン・ムラが1972年の論文で提示した垂直統御モデルは、1970年代以降のアンデス研究の大きな流れの一つを形成した。これは特に中央アンデス南部をフィールドとする研究者の間において言える。ペルー南部からボリビア北部にかけては、ケチュア族、アイマラ族といったインディオが現在でも多く、また過去においてインカ、ワリ、ティワナクといった広大な版図を有した文化が勃興した地域である。人類学においては垂直列島型環境利用を含む垂直統御の事例が現在どのように見られるのか、また先史学の分野ではこのような環境利用の形態はどこまで遡るのか、といったアプローチがなされてきた。

その後の民族誌の成果によってこの垂直統御には地域的に様々な相違があることが報告され、ム

ラのモデルが検討されてきている。しかしながら先史学の分野においてはこの垂直統御モデルは、発掘データを解釈する都合の良いモデルとして用いられるのに留まっている。つまり垂直統御モデルを前提としており、逆に考古資料から垂直統御モデルを検討するという方向には向かわず、そのため議論は単純化してしまっている。これは文書や民族誌の事例と比較し、著しく制限された情報しか提示し得ないという考古資料の性格にも一因はある。しかしながら現在見られるような環境利用が成立したプロセスの解明という目的には、まさに考古資料が不可欠であり、長いアンデス史のなかに環境利用の変化を動態的に捉えることが必要である。また、ルパカ族に見られるような大規模な垂直列島は現在では見られず、過去においてのみ追求できるため先史学における1つの重要なテーマである。

そして、先史学において垂直列島の成立過程を追求する研究の多くはティワナクを対象としてきた。その理由は以下に述べるように二つある。

一つは、ムラが依拠した史料の一つであるガルシ・ディエス・デ・サン・ミゲルの巡察記録が、16世紀にティティカカ湖南岸に生活していたルパカ族のものであるためである。垂直列島の起源の追求は中央アンデス南部、南アンデスで先史学の研究に従事する研究者の主要なテーマとなり、1970、1980年代の南アンデスの先史学の研究を振り返るとこの垂直列島モデルを視野に入れたものが多いのである。

もう一つの理由は、ティワナク社会の規模の大きさである。山本が言うように「社会的、政治的統合の未発達な小規模の部族社会などでは、環境利用の方法は、与えられた環境条件によってほぼ決定されてしまう」[山本 1982: 113]であろう。このことを考慮すれば垂直列島の成立は大規模な社会と結びついていたと思われ、そのためティワナクがその議論の対象となってきたのである。

本論文では逆の視点から見てみたい。つまりティワナク様式の遺物の分布を説明するのに垂直列島モデルを持ち出すのではなく、ティワナクの環境利用を説明するのに果たしてムラのモデルはそのまま当てはめることができるのか、という問題提起を行う。モデルは発掘データを解釈する都合の良い手段ではなく、逆に新しいデータによってその有効性を検討される作業仮説にすぎないのである。

しかしながら、考古資料から飛び地の存在を検討することは非常に困難であり、ムラ自身も飛び地とその他の影響を区別することの困難さを指摘している[Murra 1985a: 7]。一つのポイントは同一のエスニック・グループであることを証明することである。これまでの研究では同じ様式の土器の分布を一つの指標にしてきたが、それが果たしてそこに居住していた人々が製作したのか、あるいは単に交換によって取り入れられたものであるのかを区別することが必要である。

3－2．デイヴィッド・ブロウマンの高原モデル

ブロウマンはティワナクの生産活動を説明するため、ムラの垂直列島モデルと異なる高原モデル(Altiplano Mode)を提示している[Browman 1981, 1984, 1985]。両者とも多様な環境のため、限られた土地内で自給自足的農業を営めない人々による戦略である。しかしながらブロウマンは、南北800km、東西350kmという広大な高原に居住する人々にとっては飛び地を作るには距離があり過ぎるため、維持するコストが大きいという。高原モデルとは交易を重視するものであり、高原では大体同じ物資を生産するため、各共同体の労働は専業化する傾向にあり、垂直統御の自給自足的な経済システムとは明確に異なるという[Browman 1984: 122]。

ブロウマンは“職業の専門化、定期市、キャラバン交易”により高原の民は標高の低い地の生産

物資を獲得できるとしている。彼によればティワナクは初期に交易の中心地であり、半独立的な交易のセンターの緩い連合の政治的中心地であり、次第に統率力を増していったという。そしてティワナク遺跡を都市センターと呼ぶ。

この根拠として、ティワナクよりも約千年古いチリパ期の遺物の化学分析の結果を挙げている [Browman 1981: 415]。それによれば黒曜石の原産地が遺跡から北に 150km、西に 300km 離れており、銅製品の原料は現在のチリ北部の砂漠から運ばれたという。また、ティワナク期には鍬の石材が 300km 南のポーポ湖からから運ばれ、ビーズ用の方ソーダ石 (sodalite) が 175km 東のコチャバンバから運ばれたという [Browman 1984: 124-125]。しかしながら扱う遺物がどこから出土したものであるかは示されていない。

そしてワリの崩壊と同時に交易網が混乱し、ワリとコチャバンバという 2 つの重要な交易相手を失い、交換経済が不可能になったため飛び地を作って自給自足経済を始めたという [Browman 1981: 417]。ブロウマンによればティワナクは“高原モデル”と“垂直統御”の 2 つの戦略を用いたのである。即ちティワナク期前半には交易によって物資が獲得されたが、その交易網がワリの崩壊とともに混乱し、その対応策として飛び地が作られたという。

この二つのモデルは遠隔地の遺物の分布を説明するのに妥当であるかどうか、次章で地域ごとに現地調査の結果を整理し検討する。

4．遠隔地におけるティワナクの存在

この章ではこれまで報告されてきた遠隔地におけるティワナク様式の遺物を、その特徴、出土したコンテクスト、及び他の様式の遺物との関係という点から検討する。これまで遠隔地においてティワナク様式の遺物が出土したという記述はあっても、図版が載せられておらず、遺物の特徴についての説明は殆どなく、いったいどのようなコンテクストでどのような遺物が出土したのか正確な情報が得られなかった。そのため 1996 年の調査は、それまでティワナク様式の遺物が出土したという報告がある場所に限定し、遺物の確認をすることを目的とした。現地では博物館を訪れ、地元考古学者に聞き取り調査を行った。訪れた地域は、ペルー南部のモケグア地方、チリ北部のアサパ川流域、アタカマ地方、アルゼンチン北西部のサルタ、ウマワカ地方、及びボリビア東斜面のコチャバンバである (図 1)。

4－1．モケグア川流域

ペルー南部モケグア川流域は標高 1000-2000m の乾燥した土地であるが、谷底が肥沃でトウモロコシなどの作物の栽培に利用される。ティワナク様式の遺物が出土した代表的遺跡であるオモ遺跡群は、モケグア川の左岸に位置し、ティワナク遺跡から約 300km も離れている。 1983 年に調査が始まり簡単な報告がなされ、以下それに沿って見てみる [Goldstein 1989a, 1989b, 1993a]。また、町には博物館が建設され、発掘された遺物も展示されている。

モケグア川流域でティワナク期に対応する時期は、オモ期 (A.D.500-650)、チェンチェン期 (A.D.725-950)、トゥミラカ期 (A.D.950-1100) の三つの時期に区分される。

オモ期のオモ M12 遺跡は耕地を見渡す崖の上にあり、総面積 16.25ha に及ぶ。合計 133 の建造物が 369 の部屋に分かれ、そのほか広場構造も含まれる。出土土器は明らかにティワナク様式であ

る。精製土器は赤色、黒色の磨研土器であり、全体の 10 %を占める。最も多い器形はケロ形であり、その他水差し形壷、碗、高坏、人面象形壷などがある。幾何学文様、渦巻き文様、正面向きの人物、杖、門など典型的なティワナク様式のモチーフが描かれる。粗製土器は、短頸の瓶形土器が多く、口縁部に柄が付くものある。高さ 50cm 以上の大型のものが多く、中には 100cm を超える土器も出土している。器形、器種組成からティワナクと判断され、胎土や混和材の違いから現地製品と考えられる [Goldstein 1993a: 31]。

続くチェンチェン期には黒色磨研土器が消える。文様は規格化し、区割りして施文する方法がとられ、階段状文様などが多くなる。トゥミラカ期にはケロ、外反した碗、水差し形などの器形は続くが、正面向きの人物、門の神などの文様が消え、総じてティワナク様式の遺物はなくなる。

住居以外に墓地の発掘データも興味深い。オモ M10 遺跡は居住域、墓地、神殿からなる複合遺跡であり、墓地は計 19 ヶ所に分散しており、 1984 年には 104 の墓が調査された [Goldstein 1989b: 148-174]。墓は入り口直径 40-90cm、深さ約 90cm の円筒形である。副葬品はケロ、外反する碗、柄付き水差し形土器、など全てティワナク様式で現地の様式の遺物はない。しかしながら後述するアタカマ地方におけるように、幻覚剤用の道具は発見されていない。

さらにオモ M10 遺跡にはティワナク遺跡内部の半地下式神殿と類似する神殿建築が確認されている。神殿はオモ M10 遺跡の住居址の東に位置し、アドベの壁でできており、長さ 100m を超え 3 つの部分に分かれる。神殿下部は最も大きく 42 × 57m、神殿中部は 20 × 37m で、神殿上部は 34 × 36m である。神殿上部の中心部は 16 × 15m の大きさで、中央には 10.5m 四方で深さ 50cm の半地下式構造があり、切石で側面を飾られている。 1990 年に発掘されたが遺物は非常に少なく、ケロ、香炉などはまれである [Goldstein 1993b]。

以上のことからオモ遺跡群の性格を考えてみたい。まず特筆すべきは半地下式構造を伴う建造物の存在である。ティティカカ湖周辺以外では唯一の例である。その構造、建築技術は高地のものと類似点が多く、ティワナクとの緊密な関係が示唆される。さらに、オモ遺跡群の住居址、墓地においてティワナク様式の遺物が大量に出土し、かつ地方様式の遺物が欠如していることは注目に値しよう。

４－２．アサパ川流域

チリ北部の町アリカの上流を流れるサン・ミゲル・デ・アサパ川沿いは、チリで最も集中して発掘調査が行われている地域である。ここおいてもティワナク様式の遺物の存在が確認されており、ティワナクの飛び地と解釈する研究者が多い。

アサパ川流域においては A.D.400-1000 年にティワナクの影響がみられるという。その前半がカブサ期 (A.D.400-700)、後半がマイタス期 (A.D.700-1000) と呼ばれる [Berenguer y Dauelsberg 1989]。

カブサ期はカブサ様式の土器に特徴づけられる。幾何学文様を描いた赤地黒彩土器で、渦巻き、波線、三角文様が描かれる。口縁部に蛇を象ることもあり、人面を表現することもある。器形は平底碗、ケロ、深鉢、碗、水差しなどがみられる。

続くマイタス期 (A.D.700-1000) はマイタス様式土器に特徴づけられる。平底、丸底の半球形碗、把手付水差し、ケロ、橋形把手付き双胴壷など器形が多様である。段状の三角文、曲線、同心菱形文様などが黒、白で描かれ、同じ色で丁寧に縁取りされる。

このアサパ川流域においてティワナクの飛び地があった、あるいはティワナクの大きな影響下にあったとする根拠はロレート・ビエッホ様式土器の存在にある[2) 3)] [Berenguer y Dauelsberg 1989:

151, Rivera 1991: 29-30]。それは高品質の多彩色土器であり、墓からの出土品に限られる。ティワナク様式のモチーフを描いた布、突起の4つついた帽子、幻覚剤用の木の板、管、へらなどが共伴する。

このロレート・ビエッホ様式の土器の出土した代表的な遺跡はアサパ6遺跡、アサパ71遺跡の2つである。1996年に遺跡を訪れる機会を得たが、両遺跡とも標高約800m、アサパ川の右岸に位置する墓地遺跡である。アサパ川は谷底は緑に覆われた肥沃な土地であるが、そこを離れると乾燥した砂地であり、両遺跡とも砂地にある墓地である。その中にロレート・ビエッホ様式土器が副葬された墓がいくつかあり、他の墓と明確に区別されていたという [Rivera 1991: 30]。

以上まとめると、アサパ川流域では、ティワナク様式の遺物は二つの墓地遺跡のなかのいくつかの墓から出土したにすぎない。多くはカブサ、マイタスといった現地様式の土器が主流であり、ティワナク様式の遺物が副葬された土器はその中に例外的に混じり込んでいるにすぎない。また、遺物は墓からの出土品に限られ、ティワナクの住居址は確認されていない。従ってアサパ川流域をモケグア地方と並列することはできない。

４－３．アタカマ地方

アタカマ砂漠はティティカカ高原の南部、チリにおいて環プーナ地域と呼ばれる土地にある。世界でも最も乾燥した地域の一つで、砂漠の中を流れる川が唯一の水源である。

ここの地方文化はサン・ペドロ文化と呼ばれ、トコナオ期 (B.C.500-A.D.100)、セキトール期 (A.D.100-400)、キトール期 (A.D.400-700)、コヨ期 (A.D.700-900)、ソロール期 (A.D.900-1450) と細分されている [Nuñez Atencio 1991]。ティワナク様式の遺物が出土した遺跡はキトール期、コヨ期の遺跡に比定されている。特にコヨ、ソロール3、キトール5、キトール6が重要な遺跡である。

サン・ペドロ文化の固有の黒色磨研土器は大瓶、コップ、碗、鉢など多様な器形があり、黒色で表面が入念に磨かれる。これはキトール期に最高の水準に達し、外部の要素を捨てていく。キトール期後半のA.D.600年頃から土器以外の遺物にティワナクの要素が現れるという。布地、ヘビや笏を持った人物を描いたウンク（貫頭衣）、獣骨製の杯、高品質のかご細工、人面や蛇、猫科動物を表現した木製のケロ、骨や木の小型の加工製品などにティワナクのモチーフが見られる。

1960年に発見されたララチェ・カイェホン遺跡 (Larrache Callejón) では、金製品を含む豪華な副葬品が出土した[Le Paige 1964]。黄金製ケロ、人面象形壷はティワナク様式の土器と類似を示す。

続くコヨ期には土器は粗雑化する。器形はキトール期からのものを受け継ぐが、整形、磨きがあまくなり、口縁が肥厚する[4)]。この時期には刻文のはいった黒、赤の碗などもある。しかしコヨ期にはティワナク様式の遺物がキトール期より立派であるという。幻覚剤用の木の板、管、骨製の器、織物、篭、土器、スプーンなど、ティワナク様式の遺物がコヨ期の粗雑な土器と共伴することもあるという。

しかしこうしたティワナク様式の遺物は全体から見ればごく少数の布、木製品、金製品などに限られ、土器は特に少なく博物館における収蔵品は数個を数えるにすぎない。

アタカマ地方における全体の状況を考えてみると、サン・ペドロ文化伝統の継続といった性格が明らかである。特筆すべきはティワナクの要素は全く取り入れられず、確固とした黒色土器の伝統が続いたことである。また、ティワナク様式の遺物はアサパ川流域におけるように、墓地遺跡の中の少数の墓に副葬されているにすぎない。

４－４．アルゼンチン北西部

アルゼンチン北西部においてティワナクとの関係がこれまで指摘されてきたのは、ウマワカ渓谷地帯、プーナ地帯、そしてバジセラーナ地帯においてである 。ここではバジセラーナ地域に栄えたアグアーダ文化と、ウマワカ渓谷地帯のデータを整理する。

アグアーダ文化が栄えたバジセラーナ地帯は標高千数百 m で温暖な地域である。ここでティワナクの影響と言われてきたのは、土器に現れる猫科動物のモチーフである。しかしながら刻線内に顔料を充填するなど土器の施文技法が全く異なり、器形もティワナク様式の土器と共通しない。

ウマワカの町は標高約 3000m 前後にあり、アルゼンチンからボリビアに抜ける道の途中にある。ここでティワナクの影響があるといわれてきた根拠は二つある。一つは赤地に白、黒で施文する多彩色土器の存在である[Pérez 1978]。それ以前は赤地黒彩土器であり、色の増加がティワナクの影響だという。しかしながら器形、文様、色の数、どれ一つとしてティワナク様式として認定できる要素はない。もう一つの根拠は、ケロ形土器、金製品などティワナク様式の遺物が出土した、という情報であった [ゴンサレス 1991: 217]。 1996 年にはこのティワナク様式の遺物を収蔵しているリナーレス・コレクションをみるためフフイを訪れたが、残念ながらその機会を得ることができなかった。現地の考古学者に聞いたところによるとリナーレス・コレクションは盗掘品によるものであり、出土地が不明なものが多いという。また収蔵されているケロ形の黄金の器は確かにケロ形であるがティワナク様式のモチーフは一切表現されてはいないという [Alicia A. Fernandez Distel 私信 1996]。従ってティワナク様式の遺物かどうか判断できない。

従ってアルゼンチン北西部の 2 つの地域において、これまで言われてきたようにティワナク様式の遺物は実は殆どない、といえる。ティワナクと言われてきたものは猫科動物のモチーフ、三色土器など部分的な要素にすぎなかったのである。

４－５．コチャバンバ地方

コチャバンバはボリビア東斜面、標高約 2500m に位置する町である。アマゾン側にあることから適当な雨量もあり、温暖であるため農業に適した土地であり、現在ではボリビアの穀倉地帯としての役割を担っている。現在ではトウモロコシ、ジャガイモ、キヌア、小麦、大麦、アルファルファ、野菜などが主な農産物である。

ここでは発掘調査の記録があるのでまず、その報告を参照する [Bennett 1936, Rydén 1959]。

1934 年、ベネットはコチャバンバで調査を行い、そのうち二つの遺跡からティワナク様式の遺物が出土した。一つはアラニというマウンド状の墓地遺跡である。全ての墓からティワナク様式の土器片が少なくとも一点出土したという。ケロ、などの器形、多彩色による彩文、文様、色など全ての要素においてティワナク遺跡の出土品と共通する。もう一つの遺跡はティキパヤ遺跡である。生活廃棄物が堆積したマウンド状の遺跡である。ここでもティワナク様式の土器が出土したという。一方、コチャバンバ地方では甕棺埋葬が盛んに行われ、また三足土器もこの地域に特徴的であるが、こうした現地様式の遺物が両遺跡においてティワナク様式の遺物と共伴して見つかることはなかったという。しかしながらベネットの報告書には図版が示されておらず、出土したティワナク様式の土器が具体的にどのようなものであるか分からない。具体的な報告のないままコチャバンバ地方はティワナクが拡大した地域として解釈されてきたのである。

ベネットの後、スティグ・リデンが 1952 年、コチャバンバ北西部のトゥプラヤ遺跡 (Tupuraya) で発掘調査を行った。発掘では 27 もの墓が発見され、それぞれにティワナク様式の土器が副葬さ

れていた。彩文土器、無文土器あわせて142個体が出土した。器形はケロ、底がすぼまったコチャバンバ様式のケロ、鉢、壷、小型壷、柄付き水差し、耳付き球状土器、口付き鉢、高坏、などである。装飾のない土器は瓶、柄付き水差しがほとんどである。ティワナク遺跡出土土器と器形の組成がほぼ同じであり、唯一の例外はコチャバンバ様式のケロである。またリデンによればトゥプラヤ遺跡の土器の文様はティワナク遺跡のものに比べてデフォルメされているという。
これらの発掘データを裏付けるように、地元博物館には明らかにティワナク様式の土器である、ピューマや鳥を描いたケロ形土器や外反鉢が全体で数百が収蔵されている。

コチャバンバ地方におけるティワナク様式の土器の量はティティカカ湖南岸を除けばモケグア川流域とともに例外的に多い。また現地様式の土器と共伴しないという状況も示唆的である。ティワナク様式の土器は搬入品ではなく現地で製作されたと考える方が妥当であろう。底のすぼまったコチャバンバ様式のケロ、デフォルメされた動物の文様などの特徴も、現地において土器製作が行われたこと有力なデータである。現在までのところデータは全て墓についてであるが、今後住居址など墓以外の遺跡が発見される可能性は大いにある。

４－６．まとめ

これまで遠隔地に認められるティワナク様式の遺物は、ティワナクの飛び地、交易関係、あるいは軍事的拡大の証拠としてひとまとめに解釈されてきた。それは各地域間に認められるティワナクの地域性を無視したものである。ここではその地域による差異に注目してまとめてみたい。

これまでティワナク様式の遺物が確認されればティワナクの影響の及んだ地域と一括されてきたが、ここでティワナク社会の範囲をより限定する。
“ティワナク様式の土器がある時期において土器構成全体の中で大半を占める地域”をティワナク社会の範囲と定義する。

土器の分布から社会の範囲を設定するのはいささか危険かもしれない。しかしながらこれまでの先行研究においていわれてきたような、数個の遺物、あるいはいくつかの要素を全てティワナクに結びつける強引な解釈から一歩進んだものと言えよう。社会には個人ではなくある数以上の人間の存在が前提とされる。そのためここでは一定の数以上の人間が同じティワナク様式の土器を用いていた状況が認められれば、それをティワナク社会の範囲とした。これはまた、ティワナク様式の土器が出土した遺跡では現地様式の土器が混在しないことから、はっきり線引きできることからも裏付けられる。しかしながら、これは議論を進める作業仮説であって、別の基準からいけば当然この線がずれてくることはあり得ることを明記しておく。

さて上の基準に照らすと周辺地域でのティワナク社会の存在は限られることになる。それは即ち、モケグア川流域とコチャバンバ地方である。その他の地域では現地様式の土器が大半を占め、ティワナク様式の土器は例外的に存在するに過ぎず、ティワナクとの直接的、間接的なモノの動きがあったことを示すのみである。これらのデータはティワナクとの同時性を示すのみで、これまで考えられてきたように政治的影響は言えないであろう。

モケグア川流域、コチャバンバ地方においてはティワナク様式の土器が大半を占め、現地様式の土器が併存した証拠はない。少なくとも、モケグア川流域のオモ遺跡群やコチャバンバ地方のトゥプラヤ遺跡など、特定の遺跡の範囲内においては、出土土器がティワナク様式のみで他の様式の土器と共伴しないことは確かである。さらに、オモ遺跡出土の土器に見られる施文様式の違い、コチャバンバ地方に存在する特殊な器形のケロの存在などから、この二地域ではティワナク様式の土器

は搬入品ではなく現地で作られたものであることは明らかであろう。

さて、ティワナク遺跡の位置するティティカカ湖南岸を核地域とし、モケグア、コチャバンバの二地域を含めティワナク社会が構成される(図1)。このティワナク社会においては領域は連続的でなく、まさに飛び地の形態を示す。しかし、それはティワナク遺跡からユンガ地帯までの距離が遠く、勾配が急であるためその間の土地が利用しにくかったため、結果的に飛び地の形態となったと思われる。つまりティワナク遺跡とユンガ地帯をつなぐ地域も潜在的にティワナクのテリトリーであったであろう。

それでは飛び地と核地域との関係はどう解釈できるであろうか。ティワナク社会において、この二つの飛び地はどのような機能を担っていたのか。

ティワナク期には根栽類栽培と家畜飼育により、ティティカカ湖畔で十分な食料生産ができたと考えられている [Kolata 1993a, Erickson 1988]。従って食料不足のためにユンガ地帯に飛び出したというブロウマンの説は受け入れられない。これまでの垂直列島モデルや高原モデルは高原の自然資源の否定的な見方に起因しているのである [Kolata 1996: 9-10]。生業を依存していたならば飛び地はもっと多いはずであり、従って飛び地は食糧供給という視点からはあくまで副次的な性格のものであったろう。

飛び地建設の目的には別の可能性が考えられる。コラタは、ユンガ地帯での主要な生産物はトウモロコシ、コカなどの儀礼的物資であったと述べている [Kolata 1996: 9]。トウモロコシはジャガイモとともにアンデス地帯における主要な主食であり、チチャという酒の材料となる 。アンデスにおいてはチチャは儀礼には不可欠であり、入植後のスペイン人の記録にもその重要性が書き記され、インカ帝国では労働の報酬にチチャが振る舞われたという。従って、ティワナク社会においてトウモロコシがチチャの原料として必要とされたことは大いにあり得る。

これはケロ形土器、瓶形土器の存在によっても示唆される。ケロはチチャを飲むためのコップで、瓶形土器はチチャ製造に用いられたのではないだろうか。

ティワナク社会は少なくとも農業生産物については交易にという選択肢はとらず、自給する方向にあった。ティワナク遺跡から数百km離れたユンガ地帯でなければトウモロコシは生産できない。そのためティワナクは直接生産を試み、それはまさしく核地域から離れた“飛び地”の形態をとった。それでは、なぜ直接飛び地を建設して直接生産を行ったのか。

考えなければならないのはティワナク遺跡の規模である。最盛期に核地域にかなりの人口を擁したことは大いに考えられ、また、優れた石工技術、黄金製品、大量の彩色土器はティワナク社会内で職業分化が進んでいたことを示しており、そのため食料生産に携わらない人々も多かったろう。労働の報酬としてチチャが振る舞われたと考えるならば、そのためのトウモロコシの必要量は膨大なものとなる。そして、大量の物資を交易で得るためには、その相手として大規模社会の存在が前提とされる。しかし、上述の二つの地域においてはそれだけの生産を担うことができる大規模な社会が成立していた証拠はない。

しかしながらモケグア地方、コチャバンバ地方において交易相手となるような社会が存在していなかったため飛び地を建設して直接生産を行った、という説明では不十分である。ユンガ地帯の生産物を直接獲得することに意味があった可能性があり、これについては以下で検討する。

一方、アサパ川流域、アタカマ地方、アルゼンチン北西部の三地域においてはティワナク様式の遺物は副葬品として、例外的に存在するに過ぎず、それぞれティワナクとは別の社会があったと考える方が妥当である。しかし、ティワナク様式の遺物が少数ながらあることは確実である。ティワ

ナク期は広範囲にモノが動く時代であり、ティワナク社会は外部から孤立した存在ではなかった。こうした広範囲のモノの動きは果たしてティワナクの存在と関係するのであろうか。

コラタは、天然資源はティワナクによって独占されたという [Kolata 1993a: 275]。その一例として、コラタはサン・ペドロ・デ・アタカマを通る主要な交易路はティワナク国家により独占され、管理されていた可能性を示している [Kolata 1993b: 215]。つまり、国家の代表としてティワナクのエリートがアタカマに派遣され [Kolata 1993a: 277]、コヨ遺跡はティワナクからの集団が現地の集団と共存していた証拠であるという [Kolata 1993a: 275]。

しかしながら、アタカマの黒色磨研土器が外部の要素を受け入れず伝統を維持しているという状況を説明するには、コラタの説では矛盾があるのではないか。一部の墓に限られたティワナク様式の遺物は、ティワナクから送られたエリートではなく、現地の権力者が他の人々にアピールするための威信財と考えると、アタカマ地方の黒色磨研土器の伝統が継続したデータと合致する。ティワナクとの関係は、少なくとも経済的には対等であり、政治的支配関係はなかったと思われる。アサパ川流域、アタカマ地方はティワナク社会を構成する一部分ではなく、別個の社会であった。ティワナク社会は領土が明確であるところにその特徴があるのである。

5．ティワナク社会の性格

本論文では政治経済 (political economy) を、食料、工芸品、建造物といったモノが生産、分配、消費され、建造物が建設、維持される仕組み、という意味において用いてきた。先史学においては扱うデータは具体的なモノに限られため、食料、工芸品といったモノがどのように生産され、分配され、消費されたかに焦点を当て論じてきたのである。

これまでの議論をふまえ、最後にティワナク社会の性格、そしてその起源と崩壊のプロセスについて考察を加えてみたい。

5－1．一極集中と再分配システム

前章のまとめにおいてティワナク社会の範囲を設定し、それがティティカカ湖南岸の核地域とモケグア川流域、コチャバンバ地方の飛び地から成ることは述べた。南岸における遺跡分布を見てみると、ティワナク遺跡を中心とし、ルクルマタ遺跡、パフチリ遺跡などの基壇建築を含む比較的規模の大きい小センターが周辺に分布し、一般の住居址を加え三段階に分かれている。しかし、小センターとティワナク遺跡との規模の差は歴然としており、極端に一極集中型の構造である。むしろ、ティワナク遺跡とその他の遺跡の二段階構成といった方が適切である。モケグア川流域、コチャバンバ地方の遺跡も明らかに規模は小さい。こうした極端な遺跡間格差はどう説明されるのだろうか。

インカ帝国においては、衣服、土器、コカなどの資源と引き替えに一定の労働提供を要求した。こうした互酬と再分配の関係により物資が統治されたと考えればティワナク社会の一極集中は説明がつくと思われる。ティワナク遺跡は権力と再分配の唯一の中心であり、そのため中間的センターは存在せず、重層的構造ではなかった。一方で、ルクルマタ遺跡など各地の小センターが生産物を集める中間的役割を果たしていた可能性はあるが、それらは巨大な貯蔵施設を有するインカの地方センターと比較すれば非常に限られていた役割しか果たし得なかったであろう。

ティワナク遺跡には大量の労働力が集中し、労働と引き替えに食料、工芸品、チチャなどが与え

られた。また、ティワナク社会内部においては職業の専業化が認められ、石材加工師、土器製作工、金細工師など専門職人が存在した。そうした職業集団は独立に生計を立てたのではなく、ティワナクの再分配経済の中に組み込まれ、労働と引き替えに物資を得ていたと考えられる。

ティワナク遺跡が交易の中心地として発達したというブロウマンの説明では、ティワナク遺跡の巨大さと奇妙な構造は説明できない。果たしてティワナク遺跡を建設するための労働力はどこからきたのか。ティワナクが何らかの強制力を持たずして大遺跡を運営したとは考えにくいのである。ティワナクは交易により人口が集中した場ではなく、そこにおける職業の専門化は一つの社会内の再分配経済に組み込まれることにより成立したのである。ここで重要なのは交易と再分配の根本的違いである。交易においてはその相手は複数であり、各集団ごとに生産活動が担われるのに対し、再分配経済では中心部との関係を前提とした生産活動が行われ、中心部において生産物、労働力が管理される。このため再分配経済では中心地は巨大化することがあり得るのである。

ティティカカ湖周辺で栽培された根栽類、プーナ地帯で飼育された家畜の肉や毛、モケグア川流域、コチャバンバ地方で生産されたトウモロコシ、コカを中心とするユンガ産物などの物資はティワナク遺跡に集中する。そしてティワナク社会の権力者は余剰生産物を管理し、食料、酒、土器、織物、金属製品などを再分配したのであろう。こうした再分配経済には中央集権的権力の存在が前提とされるが、ティワナク社会における権力者の存在を示唆する証拠がいくつかある。

まず特筆すべきは、太陽の門に彫られた両手に杖を持った正面向きの人物の図像である。この人物の両側には、杖を持った横向きにひざまずいた人物が並ぶ。これらのモチーフは織物や幻覚剤用の木の板にも表現されている。土器、木器、黄金の器に象られた人物の顔も、全身像ではないものの、この太陽の門の人物を表しているであろう。こうした様々な媒体に表された正面向きの人物とその両側の横向きの人物は、中央とその両側という配置、人物の大きさ、正面向きと横向きという方向という違いから明らかに階層性を示している。

この人物を「中央神」と呼ぶ研究者もいるが、実際に権力者の存在を裏付けるデータがある。それは中央の人物の顔を表現した頭飾りをはじめとする見事な黄金製品である。現在ボリビアの貴金属博物館 (Museo de Metales Preciosos) が収蔵するものであるが、ティワナク遺跡内のカラササヤ出土といわれているほか詳しい情報はない。しかし、頭飾り、腕飾り、耳飾りというデータからして個人に属する工芸品であることは確実であり、こうした黄金製品を所有する権力者がいたことが有力となる。

また、以前考えられていたようにティワナクが外部に拡張した証拠は認められない。先述のようにティワナク社会はティティカカ湖南岸と二つのユンガ地帯という比較的狭い範囲に限られる。

ティワナク期にティティカカ湖北岸には遺跡が少なく、農地が利用された痕跡も少ない [Erickson 1988]。また、西斜面ではモケグア川に似た河谷が多くあるにも関わらず、それ以外に飛び地の証拠は確認されていないのである。おそらく食糧供給に関しては、根栽類はティティカカ湖南岸で、またユンガ産の生産物はモケグア川流域とコチャバンバ地方で充足できたため、必要以上に農地を拡大しなかったのであろう。

また、同時代にティワナクと競合できる大規模な社会が存在しなかったため、外部を意識せずティワナク遺跡の建設に専念できたということも考えられる。ティワナク期の遺跡はその後の王国期に比べ防御化しておらず、武器も確認されていない。現在のところ軍事征服による領土拡大を示す証拠はないのである。

5－2．ティワナクの起源

以上のようにティワナク社会の特徴として、再分配による一極集中、及び領土拡張をしなかったことが挙げられる。しかし、ティワナク社会の政治経済に関していくつか未解決の問題がある。一つは、なぜ外部にあまり関心を示さなかったティワナクが、わざわざユンガ地帯を開発し生産活動を行ったのかという問題である。大貫はアンデス世界におけるユンガ地帯の産物の持つ価値を指摘し、ユンガ地帯を直接管理下に置く重要性が形成期以前から認められ、それがアンデスにおける環境利用の伝統であると述べている [大貫 1992]。そうした視点からすれば、ティワナク社会もユンガ地帯の産物に価値を置くアンデス伝統の中に位置づけられる。

こうした遠隔地にあるユンガ地帯を直接開発する形態はティワナク期以後に引き継がれる。王国期のティティカカ湖周辺には複数の政治体が割拠し、それに伴いユンガ地帯に複数の集団が共存し開発するという [Stanish 1992]。ここに、ムラがルパカ族について示したアンデス特有の垂直列島型の環境利用の成立を見ることができる。それは自給自足経済を維持するアンデス経済の性格の延長であり、その後ムラのモデルが依拠する 16 世紀のルパカ族まで引き継がれるのである。

ユンガ地帯を直接開発する環境利用の起源は北に求められるが、図像の特徴からもこうした傾向が裏付けられる。ティワナク遺跡の太陽の門に彫られた両手に杖を持った正面向きの図像は、ペルーのワリ文化と共通するが、イズベルはその起源をプカラ遺跡など第 3 のセンターにあると述べている [Isbell 1983: 195]。さらにノブロックはティワナクの図像の完成度が高いことから、自生ではなくペルーのワリ文化に起源がある可能性を示している [ノブロック 1991: 121-122]。また、半地下式構造は、ティティカカ湖南岸よりも南には確認されておらず、今のペルー領域では形成期にまで遡る。以上のことを考慮すれば、ティワナク社会には北からの要素が多く関与しているといえよう。

5－3．ティワナク社会の崩壊

再分配による統治を行ったティワナク社会も、衰退滅亡の道をたどった。スペイン人の記録によると、インカ期以前にはティティカカ湖周辺はいくつかの王国に分かれていたという。つまりティワナクの崩壊後、各地に王国が割拠したことになる。ティワナクの崩壊から各王国の乱立まで、果たしてどのようなプロセスを辿ったのであろうか。

これまで述べてきたようにティワナク社会は互酬と再分配の関係によって成り立っていた。互酬性は円満な関係を前提とするため、もしその関係が崩れればティワナクの経済基盤は崩れることになる。

ティワナク遺跡建設、維持に必要な労働力の大きさはその規模が如実に物語っている。各建造物の建設が一つずつであったとしても、最盛期にはそれが同時に機能したはずである。とすれば、それを支えるための人口は多く、物資量は膨大であったはずである。制御する物資の量が大きくなると、労働力とのバランスをとるのが難しくなる。労働力と物資のバランスが崩れ、労働に見合う返礼を受けることができなくなれば、臣民は離反していったであろう。労働提供を拒否しティワナク社会から独立していった集団があったに違いない。ここにおいて、オモの神殿がティワナク様式の土器を用いる人々自身の手によって破壊されたというゴールドスタインの解釈は示唆的である [Goldstein 1993b]。臣民の離脱を押さえるための軍事力を持たなかったため、ティワナク社会は分裂し、多数の小王国が分立した王国期を迎えたのである。

こうしたプロセスには、コラタの指摘するように、気候変化の影響による農産物の収穫量の減少

が関係したこともあり得る [Kolata 1993a; Kolata and Ortloff 1996]。また、ティワナクが物資獲得ために領土を拡大しなかったことにも一因があるだろう。

総じて、ティワナクの崩壊の要因は最盛期の規模そのものに内在していたと考えられる。ティワナク遺跡の放棄は、互酬、再分配経済に基づいたティワナクの政治経済システムの限界を示していた。ティワナク社会の最盛期から崩壊までの期間は比較的短く、A.D.1000-1100 年頃最盛期を迎え、そして滅亡していったのだろう。南米有数の規模を誇るティワナク遺跡は放棄され、ティティカカ湖周辺ではインカ期までこれ以上の大規模な社会は成立しなかったのである。

6．おわりに

本論文はティワナク遺跡そのものではなく、遠隔地における遺物の検討からまずティワナク社会の範囲を設定し、その全体像をつかむことによりその政治経済の特徴を考察するという手順を踏んだ。モノの生産、消費を扱っていながら、それを具体的に示すデータは未だ少なく、遺跡の立地、土器の器形など間接的証拠から議論を進めていることは否めない。仮説の上に仮説を重ねていることは承知しているが、少なくともこれまでのティワナク像に、見直しを迫らなければならない点がいくつかあることは明らかである。しかしながら遠隔地におけるデータは結局のところ、肝心のティワナク遺跡の発掘データと突き合わせ検討しなければ妥当性を有しない。今後発掘データからより具体的に議論が進められることを期待して、本論文を終わる。

註

1) ジャヌセックはティワナク期が 4 つに細分できると述べているが、その根拠、及び分類の基準を示していない [Janusek 1994: 95]。

2)C14 年代測定によるとロレート・ビエッホの年代が A.D.900-1200 ぐらいを示し、新しすぎるという意見もある [Berenguer y Dauelsberg 1989: 151 nota 105]。

3) ロレート・ビエッホ (Loreto Viejo) はオスモーレ川下流のイロ川流域の墓地遺跡である。この遺跡名がチリ北部のティワナク様式土器をさすのに用いられている。しかしロレート・ビエッホ遺跡に関する公刊された報告はなくその定義は曖昧なままとなっている [Goldstein 1989a: 255 note 2, 1989b: 46]。

4) この土器様式は "casi pulida"(大体磨かれた、という意味) と呼ばれる。

引用文献

Bennett, W. C.

1934 Excavations at Tiahuanaco. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 34 (3): 359-494.

1936 Excavations in Bolivia. *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History* 35

(4): 329-507.

Berenguer, J. R., y P. H. Dauelsberg

1989 El norte grande en la órbita de Tiwanaku (400 a 1.200 d.C.). In *Culturas de Chile: Prehistoria desde Sus Orígenes hasta los Albores de la Conquista*, edited by J. L. Hidalgo, V. F. Schiappacasse, H. F. Niemeyer, C. D. S. Aldunate and I. R. Solimano, pp.129-180. Editorial Andres Bello, Santiago de Chile.

Browman, D. L.

1981 New Light on Andean Tiwanaku. *American Scientist* 69: 408-419.

1984 Tiwanaku: Development of Interzonal Trade and Economic Expansion in the Altiplano. In *Social and Economic Organization in the Prehispanic Andes*, edited by D. L. Browman, R. L. Burger and M. A. Rivera, pp.117-142. BAR International Series 194, Oxford.

1985 Cultural Primacy of Tiwanaku in the Development of Later Peruvian States. In *Diálogo Andino 4: La Problemática Tiwanaku-Huari en el Contexto Panandino del Desarrollo Cultural*, edited by M. A. Rivera, pp.59-71. Departamento de Historia y Geografía, Universidad de Tarapacá, Arica.

Erickson, C. L.

1988 *An Archaeological Investigation of Raised Field Agriculture in the Lake Titicaca Basin of Peru.* Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Illinois at Urbana-Champaign.

Goldstein, P. S.

1989a The Tiwanaku Occupation of Moquegua. In *Ecology, Settlement and History in the Osmore Drainage, Peru*, edited by D. S. Rice, C. Stanish and P. R. Scarr, pp.219-255. BAR International Series 545 (1), Oxford.

1989b *Omo, a Tiwanaku Provincial Center in Moquegua, Peru.* Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Chicago.

1993a *House, Community, and State in the Earliest Tiwanaku Colony: Domestic Patterns and State Integration at Omo M12, Moquegua.* In Domestic Architecture, Ethnicity, and Complementarity in the South-Central Andes, edited by M. S. Aldenderfer, pp.25-41. University of Iowa Press, Iowa City.

1993b Tiwanaku Temples and State Expansion: A Tiwanaku Sunken-Court Temple in Moquegua, Peru. *Latin American Antiquity* 4 (1): 22-47.

González, A. R. （アルベルト・レクス・ゴンサレス、増田義郎訳）

1991 「アルゼンチン北西部の先史美術」増田義郎・島田泉編『古代アンデス美術』 pp.201-218, 岩波書店，東京．

Isbell, W. H.

1983 Shared Ideology and Parallel Political Development: Huari and Tiwanaku. In *Investigations of the Andean Past*, edited by D. H. Sandweiss, pp.186-208. Latin American Studies Program. Cornell University, Ithaca.

Janusek, J. W.

1994 *State and Local Power in a Prehispanic Andean Polity: Changing Patterns of Urban Residence in Tiwanaku and Lukurmata, Bolivia.* Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Chicago.

Knobloch, P. J. （パトリシア・ノブロック、松本亮三訳）

1991 「帝国の工芸家たち－ワリ帝国時代の美術－」増田義郎・島田泉編『古代アンデス美術』pp.107-123. 岩波書店，東京．

Kolata, A. L.

1993a *The Tiwanaku: Portrait of an Andean Civilization*. Blackwell, Cambridge MA and Oxford UK.

1993b Understanding Tiwanaku: Conquest, Colonization, and Clientage in the South Central Andes. In *Latin American Horizons*, edited by D. S. Rice, pp.193-224. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.

1996 Proyecto Wila Jawira: An Introduction to the History, Problems, and Strategies of Research. In *Tiwanaku and Its Hinterland: Archaeology and Paleoecology of an Andean Civilization , Vol.1 Agroecology*, edited by A. L. Kolata, pp.1-22. Smithsonian Institution Press, Washington and London.

Kolata, A. L., and C. R. Ortloff

1996 Agroecological Perspectives on the Decline of the Tiwanaku State. In *Tiwanaku and Its Hinterland: Archaeology and Paleoecology of an Andean Civilization, Vol.1 Agroecology*, edited by A. L. Kolata, pp. 181-201. Smithsonian Institution Press, Washington and London.

Le Paige, G.

1964 Los cementerios de la época agroalfarera en San Pedro de Atacama. *Anales de la Universidad del Norte* 3: 49-93.

Murra, J. V.

1972 El "control vertical" de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In *Visita de la Provincia de León de Huánuco en 1562, por Iñigo Ortiz de Zúñiga*, edited by J. V. Murra, pp.429-476. Documentos para la Historia y Etnología de Huánuco y la Selva Central Vol.2. Universidad Nacional Hermilio Valdizán, Huánuco.

1985a "El Archipiélago Vertical" Revisited. In *Andean Ecology and Civilization*, edited by S. Masuda, I. Shimada and C. Morris, pp.3-13. University of Tokyo Press, Tokyo.

1985b The Limits and Limitations of the "Vertical Archipelago" in the Andes. In *Andean Ecology and Civilization*, edited by S. Masuda, I. Shimada and C. Morris, pp.15-20. University of Tokyo Press, Tokyo.

Núñez Atencio, L.

1991 *Cultura y Conflicto en los Oasis de San Pedro de Atacama*. Editorial Universitaria, Santiago.

大貫良夫

1992 「中央アンデス先史時代の環境と文化の相互関係のプロセス」『東京大学教養学部人文科学科紀要：文化人類学研究報告』6：1-46.

Pérez, J. A.

1978 Concerning the Archaeology of the Humahuaca Quebrada. In *Advances in Andean Archaeology*, edited by D. L. Browman, pp.513-524. Mouton, The Hague.

Ponce Sanginés, C.

1976[1972] *Tiwanaku: Espacio, Tiempo y Cultura: Ensayo de Síntesis Arqueológica*. 3a Edición. Ediciones Pumapunku, La Paz.

Rivera, M. A.

1991 Prehistory of Northern Chile: A Synthesis. *Journal of World Prehistory* 5 (1): 1-47.

Rydén, S.

1959 *Andean Excavations 2: Tupuraya and Cayhuasi, Two Tiahuanaco Sites.* Monograph Series, Publication No. 6. The Ethnographical Museum of Sweden, Stockholm.

Stanish, C.

1992 *Ancient Andean Political Economy*. University of Texas Press, Austin.

山本紀夫

1982 「中央アンデス高地社会の食料基盤ートウモロコシか根栽類か一」『季刊人類学』 13 (3): 76-124.